

にぼいと

チーム名：KM

制作内容

色彩を思い出しながら色を作り塗ってみることで、疲れや飽きなど内的な要素をはらんだ色彩を生成できるのではないかという狙いから制作しました。

予想

同じ色を作り続けることで疲れは出るものの、慣れていきスピードや正確性が上がるのではないか。

日が傾いていくのとともに色味の変化が現れるのではないか。

制作方法

- 1、絵の具で作りにくい微妙な色を設定し、画像で色味を覚える。（印刷をしても印刷された結果がカラーコードの色と同じであるとは限らないと考えたため、スマホの液晶にその色を映しながら作業をした。）
- 2、黒、白、赤、青、黄色（色の三原色）のアクリル絵の具を使い、お題の色をケント紙に再現する。
- 3、一枚作るごとに元の色を確認しながら、同じ色の絵の具を作り続ける。

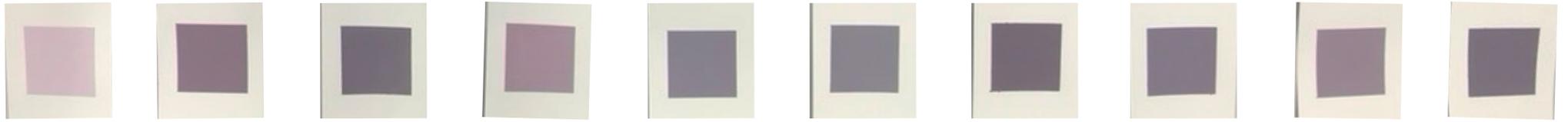


葡萄鼠色 #705b67

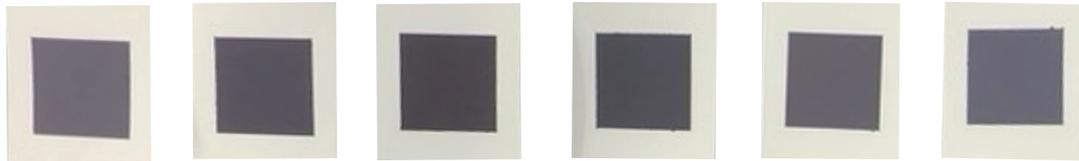
今回は葡萄鼠色を採用した。
名前のある色を扱ってみたいかったため、「日本の伝統色 和色大辞典」というサイト（<https://www.colordic.org/w>）の一覧を見たときに、程よくよくわからない色をしてると感じ、名前に何か色をイメージしやすい言葉がある色を採用した。

結果 →

片山



掛本



同じ色を作り続けたが、作る際の手際はとくに慣れることもなく、継ぎ足しなしで作れるようにはならなかった。

蛍光灯の下で作業をしていたため日光による色味の変化はなかった。



葡萄鼠色 #705b67

考察

- 色を塗り続ける中で、目の色順応を感じ最初の方が色を知覚する力が強く、見返していくたびに葡萄鼠色がただの灰色に見えるような感覚がした。
- 個人によって赤みがかかりやすかったり、どうしても彩度が上がってしまったりとそれぞれの色の好みの方に色がよってしまう傾向もみられ、飽きや疲れなどが出て再現度が低くなるとその傾向が顕著にみられた。
- 二人とも混食に使用したのは同じ絵の具だったが、混ぜ方の順序に違いが見られた。このことから、葡萄鼠色をどう捉えていたのかの違いが結果にも影響していたのではないだろうか。
- それぞれのデバイスによって明るさの設定が違ったり、貼っているフィルムの違いもあるだろうか、それぞれの人物が蛍光灯から影になる位置、光の当たる位置にいた違いなどからか、それぞれに見えていた色が違ったように思う。
- 目標と同じ正しい色を作る、という意識よりも、この色は目標の色からどれだけかけ離れているかという意識に変化していった。

